釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

▷上◁

五十九年度釧新郷土芸術賞の受賞者が決まった。絵画部門で冬の海景など厳しい北方風土の表現に取り組む増子正樹さん、写真部門で湿原の四季の美を追い、また空撮による霧発生のメカニズム解明など幅広い活動を続ける伊東俊明さん、舞踊部門で郷土に根ざすすぐれた創作、日舞普及に貢献している花柳寿登芳さん―二十八日の贈呈式を前にそのプロフィルを紹介する。

厳しい北方風土を表現

地味な中に存在感を追求

独学で始めた油絵

釧路の風景を描き続けて十四年あまり。専門は油絵で四十六年の釧美展の釧路美術協会賞、四十八年同展の釧路市議会議長賞、四十九年からは「仕事上スポーツは出来なくなった。

地味でも存在感のある絵を描きたいと増子さん

環境が年ごとに変化してゆく中で、厳しい風土を画布に残したいと思った。冬の海景に取り組んだのは、釧路が最も釧路らしい表情を出すのが冬だからだ」という。

靴屋の情景で新境地開く

それにしても、午前六時起床、午後七時に豆腐つくりの仕事を終え、このあと創作活動にはいり、深夜の十二時に就寝という忙しい毎日だ。それに五十三年からは自身の個展の開催に加え、劇団どらまぐるーぷの美術担当も引き受けている。温和な表情とは正反対にバイタリティーの塊だ。

今年の道展は近所の古くからの靴屋の情景を描いて入選、自らの新境地を開いた。「ぼくは藤村正豪、小林一雄、扇谷章二の先生らと先輩や指導者に恵まれた。今後も地味でも存在感のある絵を描きたい。風景画から足元を見つめ、息づかいが聞こえる絵も描きたい」と意欲を見せている。

昭和二十五年釧路市生まれ。寿小、北中を経て四十三年湖陵高校卒業。五十三年に由美子夫人と結婚、長男圭介君(四つ)をもうけている。

現在まで十一年連続道展入選という経歴の持ち主。

ところが、油絵は独学だ。本格的に絵筆を執り始めたのは、湖陵高校を卒業後、家業の増子豆腐店を継いだ四十五年からと遅い。何より、高校時代はテニス選手として国体道予選に出場したほどのスポーツマンで、油絵は、釧路市の成人学校で学んだのが最初い。絵は好きだったし、一人でも出来ると思って始めた。高校では同級生が中央の大学に進学するのが羨しく、家業を継ぐのには抵抗があった。でも何かほかの方法で中央に出たいと思った」それが油絵に打ち込む動機でもあったと振り返る。作品は釧路の風景が主流だが「僕らが育ったのは高度経済成長期。まわりの

□絵　画□

増子　正樹さん（三四）

（釧路市幸町六の六）